

## 啓発的な近代日本政治学史研究

——都築勉著『おのがデモンに聞け』二〇二一年

千葉 眞

### はじめに

国際基督教大学を一年半ほど前に定年退職をいたしました千葉眞と申します。西欧政治思想史、政治理論を専攻しております。本日はコメントで参加させていただきますが、よろしくお願い申し上げます。

まず本書全体の感想ですが、本書で取り上げられた近代日本の五名の政治学者（小野塚喜平次、吉野作造、南原繁、丸山眞男、京極純一）、みなさんすべて政治学者ですが、専門領域はそれぞれ異なっているわけです。本書を読ませていただき、大変周到な準備と覚悟の下に執筆された著書であると思ひまして、感銘をもってよい学びをさせていだきました。大変充実した内容でございます。東京帝国大学（戦後の東京大学も含めて）の創始と展開に関する歴史研究だけではなくて、

近代日本の政治学史研究とも一部なっているのではないかというふうには思いました。

著者は本書のねらいを次のように語っております。「本書のねらいは政治学の学説史の全体を追うことよりも、あくまでも政治学に例をとって、大学アカデミズムの一角に成立しその後そこで独特な形で継承されるに至ったある学問分野の展開を見ることである」（二五頁）と書かれているわけです。そしてこれが本書の一つの大きなねらいということだと思ひます。

もう一つ本書の特徴といえますか、ねらいがありまして、これが次のところではないかと思ひます。「大学が、あるいは学問に携わる者が、国家権力もしくは政治に対して何ができるかということは、この書物の全体を通じて我々が考えようとする事柄である。積極的に学問の成果をどこへ向けても発信すべきであるという意見も当然ありう

る。しかし真理を探究する者として、とりわけ大学という学問の府を守る者として、するべきではないこともある」(62頁、下線千葉)と書かれているんですね。ここで本書の第二のねらいとして非常に興味深いのは、政治学に携わる者が、その学問をどのような形で、社会にどのように関わっていくということも、この五人の政治学者それぞれについてやはり書かれていると思えました。この点が非常に私も興味深く読んだところです。

二番目のねらいのところですが、後者の「するべきではない」事例として「戸水事件」(「七博士事件」という問題が取り上げられているわけです。「戸水事件」の問題性としては、著者のご指摘によれば学者の側をやむにやまれぬ発言というよりも、自分たちが言えば通るとの権威をふりかざした越権行為ではなからうか、ということをこの事件のなかに読み取っておられるわけです。小野塚も事件の消極的な当事者で、穏健派の一人であったと言われているわけです。この「戸水事件」以後もやはり政治学あるいは学問全般と政治権力といえますか、政府といえますか、国家権力といえますか、その確執をめぐる問題が次々に出てくるわけで、この「戸水事件」はその最初の出来事の一つと理解できると読めました。

そこで私の「質問1」としましては、政治学者の現実政治への向き合い方は多様であり得るということでしょうか、という問いです。「戸水事件」は論外として、おのおのが選択すべき事柄ですから、五名の実際政治への取り組みは多様で、それぞれ異なるわけですが、

それぞれいろいろな取り組みが社会や政治との関係であつていい、ということなのかどうか。私はそういうふうに読み取りまして、それは私も本当に賛成できると思ったわけですが、一つ問いとして出させてもらいたいと思います。

## 一 小野塚喜平次…研究者精神の形成

次に「小野塚喜平次または研究者精神の形成」という章について論じさせていただきたいと思えます。ここで小野塚は「日本で最初の政治学者、……極めて鋭利な人」という紹介が四五頁にございます。そして『政治学大綱』(一九〇三年)について「『政治学原論』的な著作の先駆け」であると紹介され、大事などころと思えますけれども、「政治学の国家学や国法学からの独立をめざそうとしている」(四六頁)と書かれています。そして丸山眞男もこの『政治学大綱』を、「科学としての政治学の樹立者」といべき小野塚喜平次博士(四七頁)の書物であると紹介しているのですね。この一つの独自性といえますか、そういうものがここにあると思われるわけですが、法学部に(最初は文学部だったようですが)置かれる政治学の特徴として国家学や国法学からの独立をめざすという、この点が非常に印象的です。

それから一八九七年から一九〇一年まで独仏英での留学を経験しておりますが、ハイデルベルク大学で小野塚はゲオルグ・イエリネックの影響を受けました。パリではエミール・ブートミー、そしてイギリ

ス式の立憲主義を学びました。そして後年、ジェイムズ・ブライスの『近代民主政治』（一九二二年）を高く評価しております。「衆民政」（デモクラシー）へのコミットメントがそこにかがわれるということでもあります。政治学の独自性の追求という、この時代の西洋諸国においてそういう趨勢があったと思うのですけれども、それをいち早く感じ取り、そして当時の立憲主義やデモクラシーという考え方に共感をもって留学時代に学んでおられたということが分かります。そのようなことで、この立憲主義と民主主義に触れて、それを基本的に政治学を考えていくという、そういう姿勢がここに読み取れるわけでありまして、これはその後の小野塚自身の政治学だけではなくて、東京大学における政治学および日本における政治学に対して大きな意味をもったのではないかと考えられます。

「戸水事件」についてはもうすでに述べましたけれども、その後総長になるわけでありませけれども、総長時代を含めて学問と政治の関係、政治学と実際政治の関係ということについては大きな反省もあり、深い思索もあり、自戒もあつたであろうと思います。そして私の質問の二番目としましては、あまり資料や情報が出てこなかったものですからちよつとうかがいたいのですが、小野塚が総長を退いた翌年の一九三五年、このときに天皇機関説事件が起きました。この際の小野塚の対応はどのようなものだったのでしょうか、というのが私の「質問2」でございます。もしご存知でしたら教えていただきたいです。それから一九二八年―三四年に東京帝国大学総長をお勤めになられるわけ

すが、南原繁が追悼文「小野塚喜平次先生」という文章のなかで、さきほどご紹介しました『小野塚喜平次 人と業績』のなかにも含まれておりますけれども、これについて昨年（二〇二〇年）一二月の雑誌『思想』で南原繁特集号が刊行されたわけですが、そこで学者でもあり歌人でもある永田和宏氏が「歌集『形相』から辿る南原繁」という論稿を書いておられまして、そこでも触れられていることでございます。このなかで私自身非常に興味をもちましたのは、学問の自由、大学の自治、それを大事にした小野塚総長のありようというものに南原繁は共感を感じておりまして、それがまさに自分にとっても一つの道標になったと書いているわけです。

## 二 吉野作造…または行為者精神の形成

それでは次の章にまいります。「吉野作造または行為者精神の形成」ということでございます。「吉野作造は不思議な人である」と冒頭で記されております。宮城県古川（現在の大崎市）生まれであります。「古川学人」のペンネームでもって吉野作造は知られているわけですが、私もたまたまこの宮城県の古川市（現在の大崎市の古川）で生まれましたので、吉野作造については郷里の人たちは、当時も今も――商家といえますか問屋さんをなさっていたのですね――「吉野家の作造さん」という呼び名でもって想起し、古川においてはいまだに身近な人という印象が共有されているのです。それで、ご存知の通り古川

には吉野作造記念館という学術的かつ文化的な建物ができまして、吉野作造の資料等々を集めたり、それから毎年講演会を開催したりと、郷土の偉人なのですね。吉野作造をどのようにたいへん大事にしているところがございます。

私も古川出身ということで、二〇一二年に招かれまして、講演を頼まれて「新しい公共と熟議デモクラシー——吉野作造に学ぶ」という題をつけて話をしたことがございました。大川真さんが当時の館長で、断れなかったというのが一つの理由でございます。それからもう一つの理由は、ちょうど宮城県の古川の十日町というところがあつたのですけれども、吉野作造の生家の向かいに私の祖父母の家がありまして、そのような関係もありまして吉野作造とうちの祖父の千葉愷治と、それから祖父の弟で千葉豊治というのがおるのですが、彼らは竹馬の友でした。とくに豊治は作造から大きな影響を受けてまして、東京に彼も出て海老名弾正の本郷教会に吉野とともに通い、教会誌『新人』の編集を担うという形で、たいへん親しい間柄でした。というような関係もありまして、吉野作造は私の家にとつても非常に近い人であるということもあって、頼まれた以上は断れないと思ひまして講演を引き受けざるを得なかったという事情がありました。

吉野作造の一つの大きな特徴としては、一九〇六年から九年まで袁世凱の長子の家庭教師として中国の天津に滞在しているのですね。ですから彼は同時代の中国、それとともに朝鮮半島の動向に非常に精通しており、また中国と韓国、朝鮮半島に対しては自分自身の運命であ

るかのような関心をずっと保持していた。これが吉野の一つの大きな特徴ではないかと思うのです。そのようなこともありまして、吉野は中国と朝鮮からの留学生たちに対してシンパシーをもち、いろいろな意味で支援をしている。この点も都築先生の本に書かれております。

松尾尊光先生は横浜の留学生寮の管理人が借金を残したまま多額の寄付金を持ち逃げしてしまい、それがゆえに連帯保証人の吉野がその尻拭いをしたのではないかという、そういう一つの説があるということ、ある本の中で紹介されているわけですが、これも本書でも紹介されています。この関連で本書を読んで興味深かったのは、「朝日入社の真因」として、吉野がここでもかなり借財を作ってしまったので朝日入社を決断したのではないかという一つの説があるということです。これはさもありなんと私も思った点でありました。彼はたいへん面倒見がよかった。困っている人たちのためにお金を気軽に拠出。それもあってご家族は経済的にいつもピンチ続きだったようです。

小野塚と吉野の間にやはりデモクラシーへの共感というものがあつり、ですから小野塚は、新聞にいろいろ書いたり、大学のことは一生涯懸命やったでしょうけれども、同時に文壇にいろんな論文やエッセーを書き続ける吉野に対してちよつと苦々しい思いもあつたかもしれせん。けれども、やはり許したのであると。そこはやはり、お二人の間にデモクラシーの尊重とそれへの共感ということがあつたのではないかと思つておりました。この点、本書では、「小野塚はデモクラシーを一貫して衆民政と呼び、吉野は民本主義と呼んだが、両者の視

点は一致していた。しかし、吉野はその活動スタイルとしては生涯象牙の塔にこもった師とは全く異なる道を歩んだ……広く社会に出て言論活動に従事した」(二二七頁)と記されています。そして吉野は、民本主義の伝道者であるとも言われているわけです。おそらく吉野は学者であるとともに、同時にジャーナリスト的な面を強く持ち、また社会活動家でもあったのだらうと思うのです。ですので、大学にとどまっていられなかった面があったのではないかと思うのです。体はそれほど剛健な方ではなかったということですが、しかしお世話好きの性格もあって、いろいろと大学外の、学問外のことにも時間とエネルギーを割いたことが見てとれるわけです。

一八七八年に生まれて一九三三年に亡くなっておられますから五年の生涯ですね、当時としても早世と言えるかもしれません。もし一五年、二〇年のさらなる余生が与えられたら、彼自身はやはり研究に對してもかなりの注力をして、自分の仕事を完成に向けてがんばったのではないかと思われます。吉野の性格の中に、やはり世話好きというものがあると思います。ですから同郷の友人や後輩たち、小山東助や鈴木文治、千葉豊治も含まれますけれども、そういう人たちを助け、あるいはお世話をした。それだけではなくて中国と朝鮮からの留学生たちを大事にし、お世話をしたことがあったと思います。彼にはとてもインターナショナルなところがありました。ドイツの留学時代も、こういう明るい、楽しい、世話好きな彼の性格が躍動しておりまして、日記が公刊されていると思いますが、私も随分前に読みまして、それ

がおもしろいんですね。会う人会う人みなに好かれた。下宿した家族にも親しんで、もう家族の一員のようになり切ってしまった。それに若い女性たちが大変好評であった。彼の性格にそういうオープンでフレンドリーなところがあつたようです。

もう一つ、それは彼の普段着の実践力といえますか、そういうものにつながっているのだらうと思います。今日の学者、われわれとは格段に違う能力といえますか、実践力があつたと思っております。関東大震災の時に、やはりいろいろ東奔西走して被災者のために尽力をしているのです。賀川豊彦という彼の友人でキリスト者の当時の社会活動家がいたわけですが、賀川と一緒に官庁の人脈を頼りに被災者たちを助けたということがありました。

そのようことで私のコメントといたしましては、楽天的で親切で世話好きで友情と正義を重んじる吉野の性格があつて、それが彼の政治学や政治評論に、また彼の実践的な関心と行動力のようなものも反映されているのだらうと思うのです。そして彼のユニークな特質、東京帝国大学法学部の教授であるにもかかわらず、気さくで温かい、人間味のある、そういう性格というのは、私の手前味噌かもしれませんが、それぞれの「土地の霊」というのか、「環境の霊」、genius loci(ゲニウス・ロキ)という言葉がありますけれども、そういう世話好きの——東北人というのはなかなか初対面ではとっつきにくいのですけれども、気心が知れてくると非常に親しくなりやすいし、お人好しで世話好きであるという——性格があります。都築さんもこの五人の政治学

者の出身地に地方出身者が多いということではいろいろと指摘しておられますけれども、吉野の場合もそういうことが多少ともあったのではないかと思います。

### 三 南原繁…または教育者精神の形成

次に南原繁のところに移ります。「南原繁は不屈の人である」という書き出しではじまっている章です。戦前の南原は「洞窟の哲人」と言われたわけがあります。そして「南原には小野塚と内村鑑三という二人の師がいた」(二七四頁)わけです。小野塚と内村には交友関係がありまして、毎夏内村も小野塚も軽井沢で避暑をする習慣があり、この星野温泉で出会ったり、家族ぐるみの交流もあったということ、内村は小野塚から政治の現状をいろいろ細かく聞いていたようであり、小野塚の方は内村との会話を楽しんだようです。そしてこの二人の師のほかに、南原にはもう一人、新渡戸稲造という師もおりました。

著者は「南原繁は自由主義者であったらうか」ということで、「答えは然り、かつ否である」(二七八頁)と書いておられますが、私もそう思います。まず、学問の自由、大学の自治の強調です。これは前に申し上げました。それから英米流の原子論的な個人主義と功利主義への疑問です。リベラルではなくコミュニタリアンという記述がありました。したが、たしかに濃厚に「コミュニタリアン」の面があったと思いま

す。南原が自分はコミュニタリアンと明快に言ったかどうかという、このあたりは判然としません。ちょうどチャールズ・テイラーというカトリックの政治哲学者がいますけれども、彼の場合は明らかに他称コミュニタリアンなんです。みずからは、自分はトクヴィリアンであると言っています。そして、「心の習慣」(habitudes du coeur/habits of the heart)とか社会における「習俗」(moeurs/mores)というものを重視したトクヴィルへのテイラーのコミットメントがあります。それからヘルダーの個人や個性の尊厳と同時に文化や言語の重要性へのコミットメントですね。そういう意味でテイラーもコミュニタリアンの側面があったと思うのですけれども。南原のコミュニタリアンの面は、カントとフイヒテに向かわせたのだらうと思います。カントの中に果たしてコミュニタリアンの要素があるかということ、ロールズとロールズ主義者たちは反対するかもしれませんが、南原の場合にはカントにそれを見ているわけです。

それから南原の「神政政治」(「神権政治」)批判なのですから、そこでは政治権力と宗教権力が合一して上からの支配を行うのですが、これに対しては非常に否定的です。そしてプロテスタントの伝統の中ではヘーゲルに対して、そういう「国家の絶対化」といいますが、「国家の神化」といいますか、そういう面があるとして否定的なのです。それから当然、イタリアのファシズムとドイツのナチズムにそういう遺産を見ているということで、形而上学的な独断と政治的な独裁の結合としてのファシズムとナチズムに対する厳しい批判ですね、こ

それが南原の政治哲学の一つの特徴であったと思われるわけです。

同時にまた彼は、「キリスト教世界」という意味での「クリステンダム」(Christendom)という考え方に對して、「キリスト教国」であれ「キリスト教文明」という考え方であれ、アメリカを含めて西洋社会がそういうものであった(またはある)という考え方に對して批判しています。日本人のキリスト者であるので、もちろんこういう「キリスト教世界」というものとは無縁なわけでありまして、そういうことも多少あったと思いますが、そういう考え方は彼自身の価値並行論での宗教理解においても前提とされていると思います。宗教は、たとえば政治や教育や文化や学問など、いろいろなものと横並びにあるのではなくて、むしろそういうものとは異なった形で、背後にあつてさまざまな文化領域の中に浸透していく精神あるいはエートスであると捉えられているのですね。そういうことで南原によれば、宗教というのは「みずからは独自の文化領域を有しないで、かえつて『他の諸領域』に生命を与えるところに、宗教の普遍的意義がある」と『フイヒテの政治哲学』の中では述べられているわけです(一五六頁)。

そして次のところでありませうけれども、ドイツ観念論——彼はドイツ理想主義というのですね——と啓蒙主義、個人主義的な自由主義が多少なりとも緊張と言いますか、対立を孕む形ですと南原の中では扱われています。ここでは東大の政治学史講座の後継者の福田歓一先生との対比は鮮明ではないかと思うのです。しかし、南原はこうも書いてあるわけです。「ミルトン以来、英国の自由主義は良心と思想の

自由のための闘いであつた」(『政治哲学序説』、一二九頁)。ということでありますので、イギリス流のリベリズムに對して、あるいは啓蒙主義に對して全面的な否定ではもちろんなかつたし、やはり選択がそこでは行われていたのだらうと思います。

戦後の南原は、フイヒテ論においても『政治哲学序説』においても戦中には天皇制ファシズム下で誤解されないために、「国民」と訳していたドイツ語のVolkを「民族」と訳しはじめるのです。「個人と人類との紐帯」としての「文化共同体」としての民族の価値を強調するわけです。戦前と戦中で民族というと、やはり天皇制ファシズムの中に絡めとられていきますから、彼は非常に注意深かつたのですね。けれども、戦後になると彼は自身の祖国愛と言いますか、それがより表面に出て来るようになります。その背後には、戦後日本の大衆社会と原子的個人主義に對する危機感というものがあつたと思われるわけなのですけれども、それがために彼は戦後には、「民族共同体」を「文化共同体」という意味で強調するような議論を行つていきます。

戦後の南原の「民族共同体」重視の議論に對しては、丸山眞男はじめ多くの反発が寄せられたことは明らかでありまして、南原繁研究者の間でもこの点についてはなかなか手厳しい批判がなされています。雑誌『世界』が一九六四年八月に「戦後日本の精神革命」という題で南原と丸山の対談を掲載しております。その中で南原は、「祖国日本」は「民族の共同体」であるのだが、それは「いつまでも残さなければならぬ」といふものであると、「それはいわば神的秩序」であると述べてい

るのです。これに対して丸山はひどく驚き、ちよつと控えめではありましたが、ましたけれども、「神の国」もどきの南原の発言に反発しております。こういう一コマがこの対談の中になりました。これは荻部直さんがこの点に触れておられるわけです。

南原の憲法第九条の見解ですけれども、有名な当初の一九四六年、貴族院での発言では国家の自衛権およびそれに必要な最小限度の兵力は必要であると語っているわけです。しかし、憲法が施行され、だんだんに彼の見解も変化して、一九六二年の時点では「非武装の原則がやがて世界の全面的軍縮への道である」という主張もされていると本書で紹介されております（二〇七―八頁）。南原は、「自衛権のため最小限の武力の保持は警察という名分と機能の範囲において認めること」（第九条の問題）『南原著作集・第九巻』、一三二―三頁」という議論をしており、南原の変化がここにあると思います。そこには国際連合への、武力衝突が起こったような場合の介入への期待といいますが、当時の日本のリベラルな人たちの一部に共通した問題意識がありましたけれども、それを南原は共有したのだらうと思います。

それから変化といえば、晩年の民主主義観にもかなりの変化が見られるわけです。「共同体民主政」（二〇一頁）という表現を使用し、一九五〇年代以降のアメリカの公民権運動などの「参加の季節」を経て、さらに進化した新しい様式のデモクラシーが必要であるという議論をするようになるわけです。そして南原は、「どこまでも思想と言論の自由を尊重し、公の討議と説得を経て政治的社会的改革を行うことに

ある」（『現代の政治と思想』一九五七年、『南原著作集・第八巻』、六、三二、六一頁）と、今日いうところの市民デモクラシー、熟議デモクラシー、参加民主主義に対しても、一面である種の支持や共感を寄せているというふうに変わってきていると感ずるわけでありませう。

#### 四 戦前と戦後の東京（帝国）大学法学部について

次に最後のところですが、戦前戦中の東京帝国大学を含め、戦後の東京大学の法学部についてということで、政治学とキリスト教でありますけれども、戦前・戦中・戦後の東京大学法学部における政治学の陣容においてクリスチャンの教員が多く生まれたとの指摘があります。本書の三七頁です。「このうち、吉野（作造）、南原（繁）、高木（八尺）、堀（豊彦）、福田（歆一）、斎藤（眞）、それに……京極純一の七人がクリスチャンである。極めて高い割合と言わなければならない。いくたびかの戦争をくり抜けた世代において、政治学という学問が一方で強い内面の確信と他方で人間の能力の限界の自覚の双方に支えられる場合が多いことをうかがわせる」と記されております。このリストに戦後の場合、私も一九八〇年代のなかばぐらいから政治学会や政治思想学会において多くの東京大学の先生方や若い方々とも交流する機会を与えられて非常に有益だったのです。そしてその中には、このほかにもいらっしやるかもしれませんけれども、私の知る限りでは、敬称略で申しますが、岩永健吉郎、飯坂良明、宮田光雄、半澤孝磨、

松澤弘陽などの諸先生を加えることができると思うのです。

また、ライホールド・ニーバーやパウエル・テイリツヒなどへの関心が、一時期の東京大学法学部の先生方に共有されていると痛感したことがあります。南原繁、高木八尺、丸山眞男、齋藤眞、福田歓一、京極純一という世代の方々、後の世代では佐々木毅先生や、松本礼二先生、そしてその次世代では鏑木政彦先生といった方々の中でも共有されていると思いました。ですから、ニーバーやテイリツヒへの関心がやはり共有されているということを感じたことがありました。この一つの理由としては、武田清子先生が丸山眞男先生や南原繁先生ほか、多くの方々とかなり親しい関係にあったということがあるでしょうし、東京神学大学から聖学院大学に移られた大木英夫先生、それから国際基督教大学の古屋安雄先生などの交遊関係がこれらの多くの方々の中にあるということもあつたのではないかと思います。

それから次のテーマになりますけれども、戦前・戦後の(二)ですが、社会科学とキリスト教倫理、さきほど都築先生が挙げられた政治学とキリスト教の関係への問いですね。私も同じような問いというか疑問をずっと持っていました、疑問として今なおとどまっております、うまく答えられないのです。政治学だけではなくて社会科学とキリスト教倫理という形でも考えられるかなと思いました。『思想』の一九九七年七月号ですけれども、編集部から宮田光雄先生の諸著作に対する書評を頼まれました、短い書評を書いたのです。「社会科学とキリスト教倫理の緊張のなかで」というもので、このようなことを記

させていただきました。「思うに、わが国の戦後の社会科学の発展において、諸外国にもあまり類例をみない一つの現象が生起したと言つて間違ひではないであろう。それは、キリスト信徒の一群の社会科学者ないし社会思想家が、社会科学の固有の方法と課題に忠実でありつても、直接間接に宗教的問題関心を社会科学の探究に投影し、逆にまた社会科学の知見をキリスト教社会倫理の探求に生かそうと試みた事実である。もちろん、こうした試みは、社会科学とキリスト教信仰との安易な同化や折衷を意味しない。そうではなく、そこで追求されているのは、両者の弁証法的緊張であると言つてよいであろう」(七一頁)。それらの社会科学者の事例としては南原繁、矢内原忠雄、大塚久雄、内田芳明、武田清子、隅谷三喜男、飯坂良明、宮田光雄の諸氏を挙げさせていただいたのですけれども、ほかにも多くおられるのではないかと思います。私の問いといたしましては、やはりこうした現象はどのように説明がつかのらうかということなのです。これは都築先生の問いでもありますけれども、私の問いでもあり続けています。

一つの仮説としては、キリスト教の真理観と学問の精神との相即性ということがやはり考えられるらうかと一つ思つたわけでありませう。一つはやはり、この中に無教会の人たちが何人かいるわけですが、内村鑑三はもともと自然科学者だったわけですから。魚類学を札幌農学校で学び、官吏として数年北海道の魚類調査を行つています。自然科学の学徒が彼の出発点だったわけです。そういうことで彼は自然科学、自然の世界における真理と、それから宗教を含め文化、社会

における真理との間の相即性と言いますか、ある種の完全な調和や調停はありえないとしても、一部やはりコンパティブルな面があるという前提で考え始めたのではないかと思います。これはまた西洋の初期近代の科学革命の中でも見られた事象でもあります。宇宙における法則性と、宇宙の創造者である神の法則性と言いますか、真理との間にやはり相互関係があるのではないかということが、ニュートンほか多くの初期近代の科学者たちを突き動かしていたという議論がありますけれども、そういう発想が、二〇世紀の日本の社会科学にも一つありそうだと感じております。

それからもう一つ、ニーバーとテイリツヒの問題がかなり戦後日本に導入されたと申しましたけれども、二人の神学者と言いますか神学的哲学者——テイリツヒは宗教哲学者と言った方がよいと思いますが——にやはり「相関」(correlation)という考え方がありました。つまり、テイリツヒの場合は「相関の方法」なのですが、宗教と文化の間にやはり法則における相互の連関性があるという考え方で捉えた面があり、またニーバーの中にも「聖書の諸前提と経験的諸事実との間の円環的な関係」を重視するという視点ないし前提があつて、それが彼らの認識論の一つの前提にもなっているところがあるものですから、そういう影響も一つはあるのかなと考えた次第です。以上、私の方からのコメントとさせていただきます。